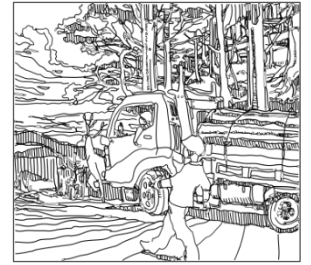


No.7

京林大だより



絵：京林大生 熊走君



サクラ咲く ～入学式～

4月8日、新入生23名を迎え、入学式が挙行されました。それぞれがどのような思いを持ち、入学式に臨んだのでしょうか。

今年の入学生は女性が4名加わりました。年齢やキャリアは多種多様です。これから2年間の学生生活の中で、一人一人が高い志を持ち、自分たちの夢を実現できる行動力を身につけて欲しいと願っています。

入学式終了後、本館横広場にて、和知駅前活性化委員会の方々が餅つきをし、振るまってくださいました。つきたてのお餅に入学生の保護者も舌鼓。とても美味しくいただきました。



京都府立林業大学校実習棟 竣工式

実習棟ついに完成!! ～竣工式～



4月8日、入学式と同日に実習棟の完成にあたり、竣工式が挙行されました。林野庁長官をはじめ、林業や地元関係者、多くの方々にご参列いただきました。

これから、京林大生は実習の「学び舎」として使用していきます。未来の担い手として、第一線で活躍できる技術を身につけて欲しいと思います。



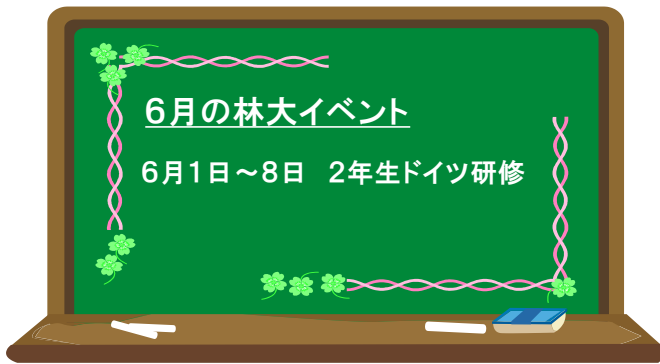


今年も踏破!!

『日本海ウォーキング』



4月10日から1泊2日で新入生オリエンテーションの一環として、林業大学校から舞鶴港まで50kmを歩きました。今年は2年生が1年生を完全サポート。1年生からすると、2年生がさぞ遅く見えたのではないのでしょうか。



校長室より

『ドイツ林業の木』

先号のこの欄では、平安時代には「左近の梅」だったという話。そして、ウメは中国からの輸入種で、当時は何でも真似した憧れの先進国の木を、庭に植えるのは上流階級の人々の誇りだったので、と解釈しました。

似たようなことが、明治時代にもあったようです。ドイツトウヒという木、ご存知でしょうか。名の通りドイツのトウヒです。

明治、文明開化の時代のわが国。西洋のものは何でも先進・近代的と、西欧に倣うのが当然という時代でした。林業が手本にしたのはドイツでした。

吉野や北山など、日本の林業も室町時代頃から素晴らしい技術を発達させてきました。しかし、学問的な体系付けは伴わず、その点でドイツ林学が

京林大のヒミツ

— 出発間近 ドイツ研修 —



京林大2年生の一大イベント!ドイツ研修が近づいてきました。京林大生は皆、楽しみにしています。2年生の岩井清健くんが、ドイツ研修へ向けての意気込みを次のように語ってくれました。

ドイツ研修の抱負

岩井 清健

ドイツでは林業が確固たる地位を築いていることや、材質にあまり差がない木材を大量に供給できる生産体制が整っていることを教わりました。

ドイツ研修では、日本ではあまり馴染みのない「フォレスター」からお話を聴けるそうなので、現場ではどのように動いているのか、また、どこに気を配っているのかを教えてもらいたいと思っています。さらに、森林と町とその住人がどのように関わっているのかも注意深く見ておきたいと思っています。



優れていると見て、ドイツ林学・林業を直輸入したのでした。それはずっと後まで継承され、私たちの大学時代(昭和30年頃)も、林学科の学生の第二外国語はドイツ語限定でした。

で、林学・林業先進国ドイツのシンボルとして、彼の国原産のドイツトウヒが、林学科の学校、林業行政機関などの構内に植えられたようです。京都で言えば京都大農学部のみならず、

美山の芦生演習林の山奥の実習用宿泊所、古くから林学科のある京北の北桑田高校・・・

とすれば、かつての木材集散地の林業の町和知にも。在りました。和知駅歩道橋の傍に。

いつ植えられたものか知りませんが、元気に生育しています。

(校長 只木良也)

